

## 『源氏小鏡』の形容詞表現に見る『源氏物語』受容

——伝持明院基春筆本の分析——

酒瀬川　なおみ

### 一 はじめに

『源氏小鏡』は、『源氏物語』の梗概書の中でも最も世間に広く流布した作品である。成立は南北朝期ごろとされているが、作者は明確には分かっていない。現在では、二条良基（一二二〇～一二三八）やその周辺人物の作とする説が定説ではあるが、確実なものではない。『源氏小鏡』の内容は『源氏物語』の要点をまとめた本文、各巻で主要とされる和歌、そして連歌の付合に必要な寄合の詞から成り立っている。寄合とは、連歌において句を続ける際に、前の句に縁のある詞のことである。『源氏小鏡』では、物語の梗概を一通り記述した後、物語本文や和歌の記述に基づいた語句を寄合の詞として挙げており、主に「そのほとんことは」に続く形で示される。『源氏小鏡』は、伝本それぞれの内容にかなりの増補、削除や訂正

が認められており、先行研究では、特に伝本分類<sup>①</sup>や他の作品との比較などに注目されてきた。しかしながら、特徴の異なる諸本が膨大にある『源氏小鏡』はさらなる研究の余地を残していると言えよう。特に、先行研究ではあまり触れられていない、各伝本の性格を把握し比較することで、『源氏小鏡』という作品の特徴ひいては『源氏物語』の享受の一端を明らかにし得ると考える。

本稿では、最善本とされる伝持明院基春筆本（以降、「基春本」と省略する。）に注目し、『源氏小鏡』の形容詞について見ていく。形容詞は、『源氏物語』の表現を特徴づける言葉の一つであり、これに注目した多くの先行研究が存在する。<sup>②</sup>一方、『源氏小鏡』の形容詞についての研究は管見の限りなされていない。梗概書である『源氏小鏡』は、『源氏物語』本文と比べると当然多くの形容詞が削られていることが予測される。反面、そこに残された形容詞からは、

梗概書としての『源氏物語』のあり方が観察できると考える。本稿は、『源氏小鏡』の最善本である基春本の形容詞の使用を分析することを通し、基春本の梗概書としての本文理解や本文評価などの諸点を考察する。そして、それを『源氏小鏡』という作品を読解するための手掛かりとしたい。

なお、本稿における『源氏物語』の本文ならびにその他の作品本文は特に断りのない限り『新編日本古典文学全集』（以降、『新全集』とする。）に、『源氏小鏡』基春本は岩坪健『源氏小鏡』諸本集成（和泉書院、二〇〇五年）により、本文に付した傍線や引用本文の中略は全て稿者によるものである。また、ここで形容詞として数える言葉には「いふかたなし」「わすれがたし」といった複合形容詞も含むものとする。

## 二 『源氏物語』と伝持明院基春筆本の形容詞比較

まずは『源氏物語』の形容詞を確認する。松浦照子氏、片岡信二氏、安部清哉氏が作成された形容詞対照語彙表を基に、『源氏物語』においてどのような形容詞が多く使われているか見る。なお、この表は複合形容詞も一つの形容詞として項目を立て、用例数を収集している。

対照語彙表に基づいて、『源氏物語』の中で多く用いられている

『源氏小鏡』の形容詞表現に見る『源氏物語』受容

形容詞の上位二〇までをまとめると以下ようになる。

表1 『源氏物語』における使用頻度上位の形容詞

	形容詞	用例数	割合
1	なし	1,339	5.92%
2	いみじ	690	3.05%
3	おほし	568	2.51%
4	をかし	534	2.36%
5	あやし	509	2.25%
6	よし	484	2.14%
7	ふかし	475	2.10%
8	うし	385	1.70%
9	いたし	369	1.63%
10	ちかし	347	1.53%
11	いとほし	337	1.49%
12	かなし	295	1.30%
13	はかなし	294	1.30%
14	おなじ	293	1.29%
15	くちをし	286	1.26%
16	くるし	238	1.05%
17	はづかし	231	1.02%
18	わかし	214	0.95%
19	うれし	213	0.94%
20	めでたし	209	0.92%

『源氏物語』の形容詞の延べ語数は二二六二九語、異なり語数は七九五語である。圧倒的に高い頻度で用いられている形容詞は「なし」である。これは、他の作品においても同じ傾向にあるようである<sup>⑤</sup>。また、上位三つの形容詞に注目すると、「なし」「いみじ」「おほし」と、程度を示す形容詞であるということが分かる。その後「をかし」「あやし」「よし」といった評価を示す形容詞や、「うし」といった感情を示す形容詞が続く。

基春本で用いられる形容詞の延べ語数は、七〇五語であった。ここで、基春本の形容詞において上位にある形容詞を表2にまとめる。基春本には異なり語数一八二語の形容詞が用いられているが、その

表2 基春本における使用頻度上位の形容詞

	形容詞	用例数	割合
1	なし	57	8.09%
2	おもしろし	38	5.39%
3	ふかし	30	4.26%
4	をさなし	17	2.41%
5	おなじ	17	2.41%
6	いみじ	15	2.13%
7	かなし	15	2.13%
8	あさまし	14	1.99%
9	うつくし	13	1.84%
10	ちかし	13	1.84%
11	めでたし	12	1.70%
12	よし	12	1.70%
13	かぎりなし	10	1.42%
14	なつかし	10	1.42%

ほとんどが一〇例以下であり、用例数はいたって少ないものである。<sup>⑥</sup>そのため今回は、一〇例以上の用例がある形容詞に注目する。

最も多く用いられているのが「なし」であるのは、『源氏物語』と同じである。三位の「ふかし」とそれ以下の形容詞とでは用例数が大きく異なり、「なし」「おもしろし」「ふかし」が突出している。今回は、表2に上げられた形容詞のうち表1にはないもの、つまり『源氏物語』の使用頻度上位の形容詞には当てはまらない、基春本における使用頻度上位の形容詞として特徴的な「おもしろし」「をさなし」「あさまし」「うつくし」「かぎりなし」「なつかし」の六語に注目する。これら六語は、基春本が『源氏物語』の内容をまとめ注釈を施した際に多用したのではないだろうか。これらの機

能を分析することで『源氏物語』とは異なる物語理解、梗概書としての基春本の性格が窺えるのではないだろうか。以降は、この六語の機能について考察する。

### 三 伝持明院基春筆本における形容詞の用法の分類

基春本の形容詞の用法は、以下の三つに大別できる。

- ① 『源氏物語』本文と同じ形容詞が用いられる例
- ② 『源氏物語』本文とは異なる形容詞で代用される例
- ③ 『源氏物語』には存在しない箇所用いられる例

①は、基春本の用いる形容詞が『源氏物語』の当該場面で同じ形容詞を用いる場合である。基春本の詞章が『源氏物語』と全く一致しているわけではないが、『源氏物語』と同じ場面で同じ対象に同一の形容詞が用いられれば①として数えるものとする。②は基春本が『源氏物語』の当該箇所における詞章とは異なる表現を用いている例である。③は『源氏物語』にはない描写を基春本が記しているものである。

ここで、今回取り上げる六語を①②③に分類した結果を以下の表3にまとめた。なお、それぞれ二段に分けて数値を示しているが、上部にはそれぞれの分類の用例数を示し、下部には割合を示している。

表3を見るとほとんどの語において、④よりも③もしくは②の割合が高い傾向にあることが分かる。『源氏小鏡』は『源氏物語』の詞章をそのまま引き継ぐものではないということは、先行研究の示すところであるが、ここでも改めてその特徴を見ることができると言える。また、六語の内「なつかし」のみ、他の語と比べて④の割合が過半数を占めているが、この内五例は和歌に用いられるものである。そのため、「なつかし」における④の割合の高さは、基春本が『源氏物語』の詞章を梗概本文に忠実に使用していることには繋がらない。

次は、用例の多かった③④における表現を分析し、基春本の形

表3 基春本における六語の形容詞の分類

計	④	③	②	
38	21	11	6	おもしろし
100.0%	55.3%	28.9%	15.8%	
17	12	3	2	をさなし
100.0%	70.6%	17.6%	11.8%	
14	7	4	3	あさまし
100.0%	50.0%	28.6%	21.4%	
13	3	6	4	うつくし
100.0%	23.1%	46.2%	30.8%	
10	5	4	1	かぎりなし
100.0%	50.0%	40.0%	10.0%	
10	3	1	6	なつかし
100.0%	30.0%	10.0%	60.0%	

『源氏小鏡』の形容詞表現に見る『源氏物語』受容

容詞の特徴について考察する。

#### 四 『源氏物語』本文とは異なる形容詞で代用される例

ここで、③の用例を以下の表4にまとめた。基春本で用いられる形容詞は『源氏物語』においてはどのような表現であったのか分かりやすくするため、基春本の用例も『源氏物語』の用例も終止形に直して示している。なお「かぎりなし」は、多く連用形「かぎりなく」の形で下に形容詞や動詞を伴うため、それぞれの用例は伴う詞章までを抜き出している。最下部の項目である「頁」とは、『新全集』のページ番号を示す。

表4の用例を見ると、基春本と『源氏物語』との間の表現の違いは、基春本が『源氏物語』の内容をまとめる際に、複数の詞章を用いて行っていた表現を一語の形容詞に置き換え、また表現を平易なものに変えたことによるものと考えられる。

『源氏物語』から基春本に置き換えられた言葉をそれぞれ見ている。基春本にて「おもしろし」に置き換えられた表現は、①、③などの一語の表現だけではなく②や④など、複数の単語で綴られている表現もある。②においては、『源氏物語』で「はるかに霞みわたりに、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれるほど、」「絵にいとよ

『源氏小鏡』の形容詞表現に見る『源氏物語』受容

表4 『源氏物語』本文中で代用的に用いられる例一覧

巻名	対象	基春本における形容詞	『源氏物語』における表現	頁
① 滑木	遣水・前栽		をかし	九三
② 若紫	北山からの景色		絵にいとよくも似たる	二〇二
③ 花宴	朧月夜		うれし	三五六
④ 須磨	須磨の家居		めづらかにをかし	二二三
⑤ 絵合	空	おもしろし	うららかなり	三七九
⑥ 松風	月		はなやかなり	四一八
⑦ 常夏	撫子		いみじ	二二八
⑧ 梅枝	糸		なまめかし	四〇六
⑨ 若菜下	梅花香		はなやかにいまめかし	四〇九
⑩ 横笛	女楽		なつかし	一九一
⑪ 空蟬	月		ものあはれなり	三五二
⑫ 小君	小君		童	一一九
⑬ 滯標	明石君	をさなし	いとさなし	二四五 (明石巻)
⑭ 幻	中将の君		小さし	五二六
⑮ 夕顔	夕顔の死		あきる	一六八
⑯ 東屋	匂宮	あさまし	くるし	六三
⑰ 蜻蛉	人目		聞きにくし	二一一
⑱ 手習	浮舟		口惜し	三〇二
⑲ 須磨	源氏		あてにきよらなり	一七三
⑲ 蓬生	末摘花の髪		きよらなり	三四一
⑲ 玉鬘	玉鬘	うつくし	ゆゆしきまでをかしげなり	九一
⑲ 竹河	玉鬘の姫君たち		よし	六一
⑲ 橋姫	宇治の大君		重りかによしづく	二四〇
⑲ 手習	浮舟		うつくしげなり	二八六
⑲ 須磨	雷	おそろしき事かきりなし	あさましうめづらかなり	二一八
⑲ 蛭	玉鬘		まめやかに責めきこえたまふ	一九六
⑲ 若菜上	女三宮	かきりなく心にかけ給ひて	すぐれてかなしきものに思ひかしづききこえたまふ	一八
⑲ 宿木	浮舟	かきりなく、いとをしみおほしめして、	あいなくわづらはしくおもしきやうに思しなりて	四六〇
⑲ 橋姫	八宮	なつかし	恋し	一三四

くも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」(二〇二頁)とある内容を、基春本では「御こ、ちのまきはしに、人々たちいて、ところ〳〵御らんするに、いとおもしろければ」とまとめたものである。北山からの景色について、具体的な描写やそれに対する光源氏の台詞といった説明的な記述は排され、「おもしろし」という一語で表現されている。③について、朧月夜の「朧月夜に似るものぞなき」(三五六頁)という独り言に対し源氏が抱く「うれし」という感情も置き換えられ、男女の駆け引きを求める源氏の好色な面が風流を愛する様子へと変化している。⑪の「ものあはれなり」という、何となく感傷的になるような意味を持つ言葉も「おもしろし」とされ、秋の月の情景に誘われて一条宮に向かう夕霧の様子が基春本では平易なものとなっている。⑧「をさなし」は「童」「いとさなし」「小さし」といった表現を言い換えている。基春本において「小さし」は人物には用いられない。⑨基春本に計二例ある「いとけなし」は源氏のみ用いられ、「童」は使いの者へのみ用いられる。基春本において、「をさなし」は平易な形容詞に置き換えたと言える他、表現の使い分けを窺うことができる。

「あさまし」の用例からは、人物の様々な苦悩が端的な形容詞に変換されていることが窺える。⑩にて匂宮が浮舟に言い寄る場面で

『源氏小鏡』の形容詞表現に見る『源氏物語』受容

は、「右近、匂宮、乳母がそれぞれに『苦し』と言ったり思ったりする。」(六三頁、頭注一六)のに対し、基春本では「あさまし」とだけでまとめられる。⑰は、行方不明になった浮舟をこれ以上捜索することは外聞が悪いとして、亡骸のないまま浮舟の葬儀を行う場面である。『源氏物語』では、侍従が浮舟の母を様々な言葉で説得し、その挙句「『さるものから、人の言ひ伝へんことはいと聞きにくし』」(二二二頁)と訴えるが、基春本では「人めあさましくて、(中略)ゆくゑなきけふりと、なし、なり。」とまとめる。そこに侍従の必死の訴えの描写はない。

「うつくしげなり」といった、微妙な様子や気配を伝える形容詞は、より明確な「うつくし」に置き換えられている。また、「あてにきよらなり」「ゆゆしきまでをかしげなり」など複数の形容表現を用いた箇所を「うつくし」と一言で言い換えている。

「かぎりなし」は併記される詞章を強調する形容詞であり、⑳では「おそろし」、㉑では「心にかく」、㉒では「いとをしむ」、㉓では「くやし」が強調されている。『源氏物語』ではそれぞれ「あさましうめづらか」「まめやかに責め」「すぐれてかなしき」「あいなくわづらはしくおもしき」と、複雑な意味合いを含んだ表現がなされてきたが、それらは「かぎりなし」という単純な強調表現に置き換えられ、また併記される言葉も「おそろし」や「くやし」といっ

た平易な表現に変化している。

「なつかし」に置き換えられた『源氏物語』の「恋し」は、薫が八宮に抱く感情である。これは「法の友として深く心を通わしあう。」(一三五頁、頭注一五)というものである。『時代別国語大辞典 室町時代編』においても、「恋し」は「身近にない特定の対象に対して、強く心ひかれるままに、親しく接したいとしきりに思う心情である。」と恋愛以外における意味も示す。一方、基春本において人物関係に用いられる計六例の「恋し」は全て恋愛における場で用いられている。基春本で「恋し」を「なつかし」に置き換えたのは、恋愛の場面と区別するためであったと考えられよう。

また、『時代別国語大辞典 室町時代編』を用いて今回注目する「おもしろし」他五語と、それに対応する『源氏物語』の表現を調べると、基春本では選ばれなかった『源氏物語』の表現はほとんど、室町時代における意味と同一のものであった。そのため基春本は、時代による形容詞の意味合いの変化のために表現を変えたというよりは、本文の梗概化のために言葉を平易なものへと変化させた側面が強いと言えよう。ただ、『源氏物語』に見える「をかしげなり」「よしづく」「ものし」は『時代別国語大辞典』には立項されておらず、基春本の成立時にはこれら三語は一般的には用いられていなかったと考えられる。基春本はこうした、当時には古語となつてし

まった『源氏物語』の詞章も理解しやすい形容詞に変換していると  
言える。

ここでは、⑧の機能について考察した。⑧は、『源氏物語』で使われていた詞章を置き換えた用例である。ここでは様々な表現を尽くして描かれた物語世界を平易な形容詞に変換し、読者に分かりやすく物語の内容を伝える姿勢を窺うことができた。「をさなし」や「なつかし」の例からは、対象や文脈によつて使用する形容詞を選別する、基春本の意図を見ることができるともいえる。また、基春本の成立時には使われなくなつていた言葉を、当時の平易な形容詞に換える様子も窺うことができた。

基春本は、『源氏物語』を梗概化するにあたって、物語の内容については世界観をそのまま表すのではなく、物語の内容を総括的に、また理解しやすく表現したという特徴が分かる。

##### 五 『源氏物語』には存在しない箇所用いられる例

新たに付加される形容詞の役割に注目すると、⑨はさらに以下の三つに分類することができる。

- ⑨-1 物語の梗概として総括や追加の役割を持つ例。
- ⑨-2 語り手の評価、物語の注釈としての役割を持つ例。
- ⑨-3 『源氏小鏡』の寄合に関する記述としての役割を持つ例。

以下に、これらの用例を見ていく。◎―1は、『源氏物語』には記載されていないものの、物語の叙述の一つとして用いられているものである。先に見た◎とは異なり、場面をまとめるだけではなく、本文中には記載されていないが、本文から推測できる内容を物語の内容として追加する様子が見られる。

◎―1の用例をそれぞれの語ごとに見ていく。用例は表5〜10にまとめた。

まず、「おもしろし」の用例を表5に示す。ここでは、計九つの例が見られた。①について、帚木巻で源氏は空蟬と契りを交わした後も空蟬の事が忘れられず、再び紀伊守の邸を訪ねる。『源氏物語』では源氏は方違えにかこつけて紀伊守邸に向かう。そのため基春本のように邸の遣水については言及していなかった。ただ、「紀伊守おどろきて、遣水の面目とかしこまり喜ぶ。」(二〇九頁)とあり、また、『新全集』の頭注にもあるように源氏が来訪の理由に遣水のことを紀伊守に話したことは想像できる(二〇九頁、頭注二九)。基春本では『源氏物語』には記さないものの、その描写から想定できる内容を物語の内容として追加していることが読み取れる。②は『源氏物語』では「我ながらいとすこう聞こゆ」(一九四頁)とあるのみで、「おもしろし」という言葉はない。ここで「おもしろし」が追加され、須磨に響く源氏の演奏が荒涼としつつも風流であるこ

表5 ◎―1「おもしろし」の用例(計九例)

巻	基春本本文
① 空蟬	は、き、のまきのかた、かへのとき、いよのすけかめを御らんして、あかすわれぬ事おほして、いゑのやりみつ、おもしろしとて、にはかに又、かれかもとへおはします。
② 須磨	ゆきひらのちうなこんの、「せきふきこゆる」とよみけんも、おほしめしあわせて、なみたおつとはおほえねと、まくらうくはかりなり。みやこより、もち給ひしきを、ひきよせて、心のま、にひきすましたまふに、われなからすこくおもしろし(ママ)。
③ 少女	この女このきみ、秋のゆふへをしめたまへは、秋のを、はるかにうつつしうへて、こたかきもみち、いろをまし、ことにおもしろし。
④ 少女	きたなれば、ふゆのけしきをうつつして、ふゆかれのへのけしき、 五はのまつ、ゆきのあしたは、まことに、すたれもあけぬへし。 ことにすこく、おもしろし。
⑤ 梅枝	くろほう、あかしのうへ、あはせ給ふ。かゑうのほう、花ちるさと。し、う、源氏あはせ給ふ。いつれも、とりくにおもしろし。
⑥ 若菜下	かみのまきに、はるのすゑつかた、六てうのあんにて、かすめるくれのおもしろきに、この御かたのにはにて、おんまりあり。
⑦ 鈴虫	このまき、す、むしといふこと。八月十五夜おもしろくすみわたりて、かきりなくあはれなれば、
⑧ 宿木	此まきに、かほるを大やけの御むこに、とりそめ給はんとて、世のそしりをおほして、女二のみやの御かたのきく、えならすおもしろきゆふはへに、「てんしやうに、たれか候」と、御たつねあれば、
⑨ 手習	月のおもしろきに、つくくとなかめて、 心には秋のゆふへをわかねともなかむるそてにつゆそこほる、



表6 ①「をさなし」の用例(計一〇例)

巻	桐壺	若紫	若紫	若紫	葵	須磨	絵合	若菜下	御法	竹川	
	御つほねは、ふちつほなり。この宮をば源氏も、おさなくより、おほけなく心にしめたてまつりて、	このまき、わかむらさきといふ事、むらさきのうへのおさなかりしを、よみ給ひし、	これは源氏、ま、は、のふちつほのみやを、おさなくより心にかけきこえて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかすを御らんするも、もしこの心やなくさむと、おもひしゆへなり。	おさなくよりは御は、におかれて、かのうはきみに、そたてられておはしまし、なり。さて、このひめきみのうつくしき御かたちをのそきて御らむしてか、	このむらさきのうへ、十の御としより、とりもちてそたて給ひしかとも、いまとおさなくおはするうへ、このひめきみも、源氏のわか物におほしめたる事とは、ゆめくおほしもよらす、すくるとに、	おさなくよりおふしたて、ち、は、になりてもてなし、そのらのなかに心さしならふかたなくおほして、	かのしゆしやくるんには、おとなしきみやも、おはしませす。はるみやばかりそ、いとおさなくおはしまし、。	ふゑは、ゆふきりの御こ、ひけくろの大しやうの御こ、たまかつらの御はら、これら、いとおさなきほどにて、ふかせたまふ。	三のみやを御まへに、すへたてまつりて、「われ、なくなりたらむときは、このたいにすみ給ひて、むめとさくらをば、かたみに、	とりわけみたまへ」と、申給へは、をさなき御心にも、いたくふしめになり給ひて、	竹川のはしうちいでし一ふしにふかきこ、ろのほどはしりきや(中略)これもいまた、とうし、うとて、おさなかりしとあそびて、「たけかわ」なとうたひて、よみし歌也。

とが脚色されている。③④からは、六条院の設えについて同じ「おもしろし」を用いて端的にその風流な様子をまとめている。なお④については、『源氏物語』において少女巻の冬の町にはない「五はのまつ」を示し、初音巻における明石君の「年月を」歌を想起させる。また、「すたれもあけぬへし」と白居易の「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」も示しており、『源氏物語』にはない風景を追加し物語世界を広げている。⑤では、基春本は薰物合の内容について、薰物とそれを制作した人物を記した後に総括して「おもしろし」とする。『源氏物語』のように、それぞれの登場人物が作成した薰物の様子を一つ一つ評価する描写はなく、物語の内容を端的に理解しやすくまとめている。⑥⑦⑧は、天候や月に対し「おもしろし」が用いられている。⑥⑦⑧について『源氏物語』では、「かすめるくれ」「八月十五夜」「ゆふはへ」の様子が様々な言葉で語られるが、基春本ではそれを「おもしろし」という一語でまとめている。⑨については、『源氏物語』では「心には」歌を詠む際に月が出ておらず、基春本が追加した内容である。<sup>12)</sup>

表6には「をさなし」の用例、計一〇例を示す。ここでは、⑩⑪⑫⑬⑭⑮のように過去からの継続を示す際や、⑩⑪⑫⑬⑭⑮のように人物がまだ幼かった頃の場面を描く際に使用していることが窺える。⑯については、『源氏物語』では幼い匂宮が、紫上の遺言に思わず涙

を流しそうになる描写には「をさなし」という表現は用いられず、句宮の言動のみが記される(五〇二頁)。基春本は、句宮の幼い状態を強調し、いじらしさを一層強く演出している。また、基春本における「をさなし」は全て精神的な状態を指すのではなく、時間的または肉体的な状態に限られていることも特徴的である。ここで「をさなし」はあくまで登場人物の状態を示すために用いられており、人物への評価を示すものではない。

表7は「あさまし」の用例計二例をまとめた。ここに追加された「あさまし」は、恋愛の場において望ましくない状態にある様子を示している。⑳では左馬頭が女の不貞の様子を、㉑では浮舟が世を捨ててなおかつての恋愛が忘れられない自らの状況にあきれるといった評価を加えている。基春本は、恋愛感情に捉われている登場人物の様子を、作中の人物の心内を通して「あさまし」と評価している。

表8に示すように、「うつくし」の用例は計三例ある。㉒について、『源氏物語』では源氏が「光る君」(五〇頁)と名付けられる際に「うつくし」という表現は用いなかった。基春本は「うつくし」を使い、源氏的美質を読者に分かりやすく認識させている。㉓について、『源氏物語』の鬚黒大将は「色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし」。(行幸巻、二九二頁)とあるものの、直接的に外見を否

定する表現は見られない。基春本では、鬚黒大将を源氏と比べ「うつくしくはあらさり」と評価することで、大将の特徴を端的に表現している。㉔を見ると基春本では、浮舟の誕生は浮舟の母君が陸奥国の守に嫁いだ後ということになっている。また、『源氏物語』で

表7 ㉑—㉒「あさまし」の用例(計二例)

	基春本本文
㉑ 手習	ねやのつまちかきこはいの、いろもかもかはらぬも、「はるやむかしの」と、こと花よりも、これに心をよせらるゝは、あさかりし御にはひの、しみにけるにやと、われながらあさまし。
㉒ 帚木	此うへ人、「くるまにのりてゆかん」といふを、いつくそともふに、わかゆくところなれば、あさましとおもふに、

表8 ㉑—㉒「うつくし」の用例(計三例)

	基春本本文
㉒ 桐壺	かのはかせ、この宮の御かたち、ひかりか、やき、うつくしくおはしけるにめて、ひかるきみとつけたてまつりしより、この源氏をは、ひかるけんしといふなり。
㉓ 真木柱	又、この大しやうを、ひけくろといふ、いみやうなり。御ひけくろくおはしまして、見さま、源氏などのことく、うつくしくはあらさりけめと、
㉔ 宿木	いて、すりやうのめになり、いひしらすうつくしきひめきみを、うみたてまつりて、は、人しれす思ひかしつきて、その、ち、かみのもいできたるにも、ゆめくおなしつらにもせず、とし月ふるほとに、甘はかりにもなり給ふ。

表9 ㉔—1「かぎりなし」の用例(計五例)

	卷	基春本文
㉔	明石	かのうらへうつろい給ふ。にうたう、よろこひかしこまりて、かぎりなく、いつきたてまつる。
㉕	横笛	かしは木の、ひとめくりのふちしにも、おやたち、かぎりなくなげき、とふらいたまふ。
㉖	鈴虫	このまき、す、むしといふこと。八月十五夜おもしろくすみわたりて、かぎりなくあはれなれば、六てうのゐんは、うそふきななめ給ひて、
㉗	総角	あねきみ、(中略)御とし廿六にて、かくれ給ふ。大しやうは、かぎりなくおもひなげきて、御いみにこもるとて、みやこへも、かへりたまはず。
㉘	宿木	みやは、かの中のみみを、かぎりなくおほしめして、夜かれなくならひたまひて、いつしか物おもはせんことを、かなしく心よりほかに、なげきたまふ。

表10 ㉔—1「なつかし」の用例(計二例)

	卷	基春本文
㉔	須磨	源氏えならず、なつかしく、めつらかにて、かたみとて、くろこま、こまふ多など、たてまつり給ふほどのこと葉。
㉕	匂宮	三の宮うらみ給て、わさこのみて、はるは、まかきの梅をかさして御身にふれ、夏は、はなたちはなのそでのか、なつかしく、(中略)にはひをあつめ給へは、

は母君が浮舟のことを「ゆめくおなしつらにもせず」育てていたことは、浮舟が二〇歳になったという描写以降である。基春本は、物語の時系列を改変しつつ梗概本文を作成していることが窺える。<sup>13)</sup>

表9では「かぎりなし」の例、計五例を示す。㉔は、柏木の一周忌の場面である。『源氏物語』では、柏木の両親が亡き息子の、世間からの信望の厚さを改めて感じ「いみじうあたらしうのみ思し焦がる」(三四六頁)様子が描かれる。「あたらし」という表現から、世間的に地位の高い息子の不在を惜しむ気持ちが読み取れるが、一方基春本では、柏木の両親が自分たちの子供を亡くしたことをただただ悲しむ気持ちが表現される。㉗については、『源氏物語』では勤行をする女三宮の描写を含めた、十五夜の風情のある様子が表されるものの、基春本では単に十五夜の美しさが強調されている。㉘㉙は、『源氏物語』では様々な行動や心情が描写されているが、基春本ではそれらを「かぎりなし」でまとめ、端的に内容を伝えている。

表10は、「なつかし」の用例、計二例を示す。㉔については、『源氏物語』では頭中将が須磨の源氏を訪問した際に「なつかし」という言葉は使われていない。基春本は「なつかし」を用い、久しぶりに果たした頭中将との再会を表現している。㉕は匂宮が薫の香りをうらやみ、自分で香を調合する様子であるが、『源氏物語』には夏の

描写はない。しかしここでは、『古今和歌集』の「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(巻第三、夏歌、一三九番、読み人しらず)という歌を基にした詞章「はなたちはなのそてのか」を用い「なつかし」を導き出している。

ここまでで◎—1を見てきた。そこでは『源氏物語』において言葉を尽くして描かれてきた場面を一つの形容詞にまとめ、物語内容を端的に示していた。これは『源氏物語』の梗概としての側面が現れたものと言えらる。『源氏物語』にあつた複雑な心情や情景は、基春本からは読み取ることができない。その一方で、本文中には記表11 ◎—2「おもしろし」の用例(計二二例)

	巻	基春本本文
③②	若紫	ことさら、このまきおもしろくつくりたりとて、しきふのみきは、むらさきしきふとは、つけさせたまゑりしか。
③③	葵	おほかた、おとこ女はう、あひそめて、三日の夜は、ふんくにおいはふことなれば、御ゆるあるへきに、あふひのうへかくれ給ひて、かへり給ひたるおゆふしなれば、ことしく人のおもふへき事をは、かりて、ことさらはかりのきにて、これみつにしのひやかにたまへり。それを心へて、なにと、いたてまつるへきならねは、「ねのこ」といいたてまつる。「三か一」とは、「三はいを—せんにすへて、つるのくちに、はしをくわへさせて、いたすものなれば、けしきはかり「三か一にてあらむかし」とのたまへり。おもしろかりし心のうちともなり。
③④	少女	はなちるさと、きこえしは、夏の御かたにて、うのはな、さうひ、ほうたん、ふち、やまふきなど、うへたり。はるちるさによそへて、おもしろし。

『源氏小鏡』の形容詞表現に見る『源氏物語』受容

③⑤	少女	はなその、こてうをさへやした草の秋まつむしはうとくみるらん と、のたまひをくりたりしは、いと、おもしろき御心ともならんかし。
③⑥	蛭	かのかつらのしんわうと、きこえし人は、せいわてんわうのたい五のおんこ、ひはのしやうすそかし。(中略) ひわひきとあり。おもしろし。
③⑦	常夏	この御かたのにはは、なてしこを、からのもの、やまとなてしこも、と、のへて、うへわたされたり。かのあま夜の物かたりに、ち、おと、このひめきみを、なてしこと、かたりいたし、ゆへにやと、おもしろし。
③⑧	野分	おほかたのをきはすくつかせのをともうきみひとつにしむ心ちして と、よみ給ひし。おもしろき事ともなり。
③⑨	藤裏葉	又、行幸のおり、おもしろかりしは、そのころのいんと申は、御あに、しゆしやくみんにて、おはします。しゆしやうは、人こそしらね、六てうみのおんこ、れいせいみんにておはします。御さをりやうみんのにてあるへきを、源氏のるん、なをひけて、大しやう大しんの御さにせられたるをしゆしやう御らんして、(中略) いんの御さと、ひとしくせさせられたり。
④⑩	幻	みのり、まほろし二くわんは、いつれも、おもしろければ、とりわけたる事はなし。
④⑪	橋姫	このまきに、「ありあけの月をまねく」といふて、よろつのやさしく、おもしろき事にする事あり。
④⑫	浮舟	みねのゆきみきはのこほりふみわけてきみにそまよふみちはまよはず といふうた、なにことに、おもしろきたために、いふことなり。

載されていないものの本文から推測できる内容を、物語の内容として補足する役割も見ることができた。そうすることで登場人物の人物像を補強し、時に他の文学作品の詞章を呼び出し、『源氏物語』の内容を理解しやすく、また豊かなものにしていくことが窺えた。

◎―2は、語り手の評価を示し、また物語の注釈的役割を持つ例である。各語の用例を表11、13にまとめる。なお、◎―2の用例として「うつくし」「かぎりなし」「なつかし」の三語は確認されなかった。

表11は「おもしろし」の用例、計二二例を示す。◎③④は物語内容ではなく、『源氏物語』そのものの評価と関わるものである。④①は、橋姫巻を読むにあたって注意すべき見所を読者に紹介している。宇治の姫君たちの風流な言動を評価し、読者に薦めている。また、◎③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿は『源氏物語』にはなく、物語に対する注釈を行った後に付された評価である。◎③④では、光源氏が惟光に対し、若紫との婚姻の儀の支度を指示する際、あからさまではなくほのめかすような指示を出し、また惟光もそれを心得た返答をしたことを評価している。基春本が「あふひのうへかくれ給ひて、かへり給ふおりふしなれは」と説明するように、この時は葵上が亡くなった直後であり、盛大に儀式を行うことを避けた源氏と惟光の心遣いが「おもしろし」とされている。◎④では、「花」の名を冠した花散里にふさ

表12 ◎―2「をさなし」の用例(計一例)

巻	基春本文
◎④	このまき、わかむらさきといふ事、(中略)てにつみていつしかも見んむらさきのねにかよひけるのへのわか草 と、よみ給ひしゆへなり。「わかむらさき」とは、「わか」はおさなき文字なればなるへし。

わしく、夏の花を植えた夏の町を評価している。◎⑤では、秋好中宮に対する紫上の和歌の応酬を評価するものである。◎⑥では、琵琶の名手であった清和天皇の第五皇子と、同じく「ひわひき」である兵部卿官の造形の類似を「おもしろし」としている。◎⑨は、行幸の折に源氏の実の息子である冷泉帝が、朱雀院と源氏の御座を同列に仕立てたことを評価している。基春本の語り手は、◎③◎⑤◎⑥◎⑨◎⑩のように物語の描写に教養や心配りを感じられる際や、◎④◎⑦のように物語ですでに語られた内容を示唆する描写の妙、◎⑫のように和歌に対する評価などについて「おもしろし」を用いる。基春本の語り手が『源氏物語』から読み取れる教養や、物語内容の繋がりに面白みを見出す様子が分かる。また、◎―2における「おもしろし」の用例は、他の形容詞の用例数に比較すると圧倒的に多い。これが基春本において「おもしろし」が群を抜いて多い所以であろう。表12には「をさなし」の用例、計一例を示した。和歌にある言葉

「わか」は幼いという意味を指す旨の注釈である。読者が和歌を理解できるよう、細かな点にも注意した注釈である。

表13には「あさまし」の用例、計五例を示す。④の「六月のからひる」という言葉は『源氏物語』には登場しない。基春本は、博士の娘の服薬した草葉が「からひる」であることを解説し、その特徴をも述べる。⑤の内容は『源氏物語』では須磨巻ではなく明石巻の

表13 ①—2「あさまし」の用例（計五例）

	巻	基春本文
④	帯木	こくねつのさうやく、ふくして、くさきによりてあはず」といへり。六月のからひるといふ物にや。このか、あさましくくさし。
⑤	須磨	ついたちより十三日までは、をやみなくふりて、十三日のあかつき、おはしますらふに、かみなりおちかゝる。あさましなど、いふはかりなし。
⑥	若菜下	ねこのつなにて、みすのきて、御すかた見えたまふ。そのおりより、やまいとなる。あさましかりし、ことなり。つゝに、このみやゆへそかし。みを、いたつらになし、ことは。
⑦	若菜下	それよりそ源氏は、人めはかりにて、つゝに、その、ちは、あひたまはず。人しれぬ御心のうち、さこそと、あはれにもあさまし。
⑧	浮舟	われかくてうき世の中にめくるともたれかはしらむ月のみやこにことふれて、みやの御おかけのわすれぬも、あさまし。

『源氏小鏡』の形容詞表現に見る『源氏物語』受容

序盤に描かれる（二二五頁）。基春本は、物語の叙述順を改変し、また雷の様子を語り手の立場から説明している。また①—1で述べたように、基春本の「あさまし」には恋愛の場において望ましくない状況を評する際にも用いられる。基春本の語り手は、不貞をはたらく様子や、恋愛に拘泥する登場人物を「あさまし」いものと考えようである。ここでも⑥⑦では女三宮と柏木の密通を、⑧では浮舟が匂宮を忘れられない様子を評価している。なお、『源氏物語』では、浮舟が匂宮を忘れることができないと明言されている箇所はなく、基春本は『源氏物語』とは異なる浮舟像を描き、それに「あさまし」という判断を下しているのである。<sup>⑩</sup>

①—2は、基春本の語り手による評価が描写される例であった。物語の内容に注釈を加え、また梗概書の語り手の立場から評価を下すことで、『源氏物語』の読み方を示唆する効果を持つ。これは『源氏小鏡』が「手軽なハンド・ブック」（注①伊井氏の著書八〇一頁）であるという性格とも深く関わっているであろう。

①—3は『源氏小鏡』の寄合に関する記述の例である。用例は全て表14に示した。

④9は、浮舟の住む邸が薫によって嚴重に警備されてしまったために匂宮との逢瀬が難しくなったという浮舟巻の一場面について、「よりあひにも、よく候へく候」と評価している。⑤0は夕霧が雲井

表14 ㉔—3 「おもしろし」「をさなし」「なつかし」の用例(各二例)

巻		基春本本文	
49	浮舟	みやは、物のたまはんと、し給ふところも、ひんなければ、むまのあをりをしきて、(中略)なくく物の給ふに、さとひたるいぬの、こゑくにおとなふも、心ほそくおそろし。これらそ、このまきにては、おもしろきくにて、よりあひにも、よく候へく候。	そのほとのことには、 くもゐのかり。ねさめ。もうこい。おさなきほと心のつくし。 いとこ。 など、つけへし。
51	須磨 少女	なつかしく、あかぬなこり、めつらしきに、とめかねたるなみたなとのふせいをつけへし。	

雁に恋情を寄せる場面を寄合の詞にしたものである。「おさなき」という形容詞で、夕霧の幼少からの恋情を表現していることが分かる。㉔は、句を続ける際に、内容的に気を付けるべきことを記しているものである。ここでは須磨巻において、頭中将が源氏を訪ねてきた場面を取り上げ、この場面を連歌の句として付ける際は「なつかしく、あかぬなこり、めつらしきに、とめかねたるなみたのふせい」を意識するよう述べられる。「なつかし」では、源氏が頭中将の来訪により都を思い出す様子が表現される。基春本は、寄合に物語内容を想起させる形容詞を効果的に用いる。

## 六 まとめと今後の展望

今回は、基春本で多く使用されている形容詞に注目し、その機能について考察した。ここでは、「おもしろし」「をさなし」「あさまし」「うつくし」「かぎりなし」「なつかし」の六語を三つの用法に分類することができた。この内、基春本に多かつた用法は㉔と㉔、つまり『源氏物語』の詞章とは異なる表現として用いる例と『源氏物語』には存在しない箇所を用いる例であった。㉔では、平易で当時の用法に合った形容詞への置き換えにより、物語内容を忠実に伝えるというよりは理解しやすいものへと改変する梗概化の姿勢を見ることができた。㉔はさらに、物語の総括や内容の追加をする例と語り手の評価や物語の注釈をする例、寄合に関する記述の例に分けられた。そこでも、基春本が『源氏物語』の内容を理解しやすいようにまとめる様子が見られた他、教養を感じられる場面に肯定的な評価を下し、恋愛において望ましくない状態に否定的な評価を下すなどの語り手が物語内容を評価する姿勢が見られた。

今後は、今回取り上げなかつた形容詞や表現を扱い、基春本の分析を進める。基春本の語り手の興味を一層明確に示していきたい。さらに他の伝本の表現にも注目し、他の古注釈や梗概書と比較することで『源氏物語』享受史における『源氏小鏡』の位置を明確なものとする。

のとしていきたい。

注

- ① 『源氏小鏡』の諸本分類研究は、稲賀敬二『源氏物語の研究 成立と伝流 補訂版』（笠間書院、一九八三年）第三章第二節「源氏小鏡の類本と成立」、伊井春樹『源氏物語注釈史の研究 室町前期』（桜楓社、一九八〇年）第一章第二節「源氏小鏡」の諸本―その成長の諸相―、岩坪健「古活字版『源氏小鏡』（国会図書館蔵解題・翻刻）」（『親和國文』三五、二〇〇〇年二月）に代表される。
- ② 池田裕「源氏物語『桐壺の巻』における形容詞の用法」（『麗沢大学紀要』七、一九六七年二月）、中川正美『源氏物語文体攷 形容詞語彙から』（和泉書院、一九九九年）、本廣陽子「もの」形容詞の意味と用法の発展―源氏物語の果たした役割―」（『国語国文』七七卷六号、京都大学文学部国文学研究室、二〇〇八年六月）など、『源氏物語』における形容詞の御研究は多数存在する。
- ③ 基春本は第一系統本で、底本は別本とされている（注①伊井氏の著書八〇二頁）。しかし、本稿で取り上げる『源氏物語』の本文と『源氏物語別本集成』『源氏物語別本集成続』とを比較したところ、両者の間に大きな異同はなかった。そのため、本稿では『新編日本古典文学全集』の本文を基春本との比較に用いる。
- ④ 松浦照子、片岡信二、安部清哉『平安文学における形容詞対照語彙表』（『フェリス女学院大学文学部紀要』二六、一九九一年三月）
- ⑤ 注④を参照すると、表にある作品のすべてが「なし」を有し、他の形容詞よりも高い頻度で使われていることが多いと分かる。
- ⑥ 一〇例以上用いられている形容詞は約七・七％である。

『源氏小鏡』の形容詞表現に見る『源氏物語』受容

⑦ 堤康夫『源氏小鏡』の表現とその方法（王朝物語研究会編『論叢源氏物語四』、新典社、二〇二年）

⑧ 横笛巻の当該箇所は、基春本では「八月中はの月、ことにおもしろくあはれなるに、あくかれて、大しやう、このみやへまいる給ひたれは」とあり、「おもしろくあはれ」「あくかれ」から『源氏物語』の世界を忠実に表現しようとする姿勢は窺える。ただ、「ものあはれなり」という言葉を選ばず「おもしろし」という形容詞を追加したことで、言外に感じる夕霧の感傷的な心情は省略されると言えよう。

⑨ 基春本の「小さし」は計二例で、全て舟に対して用いられている。

⑩ 注①の伊井氏の著書八八〇頁に、「持明院基春は基信の二男、天文四年（一五三五）七月美濃で没した。八十三歳（公卿補任）。当時の文化人として和歌・連歌を嗜み（新撰菟玖波集に二句入集、多くの本を書写もしている。源氏物語関係について言えば、『口伝抄』（宮内庁書陵部蔵）・『仙源抄』（京都大学図書館蔵広橋本・天理図書館蔵）などの識語にその名が見える。」とあり、基春本は室町時代に活躍した持明院基春の書写本とされることが分かる。また、岩坪健『源氏小鏡』諸本集成（和泉書院、二〇〇五年）七六八頁に「底本の書写年代は、おおよそ基春が活躍した頃と見てよからう。」とある。

⑪ 初音巻において、明石君は明石姫君に鬚籠や破子を送るが、そこに五葉の枝が付けられている。

⑫ 『源氏物語』本文では、「心には」歌の直後の場面に「月さし出でておもしろきほどに」（三二七頁）とあり、基春本はこの場面を混同したとも考えられる。

⑬ 『源氏小鏡』が『源氏物語』の叙述の順を改変しているということは、橋本美香『源氏小鏡―梗概化の手法―』（関西大学『国文学』八八、二〇〇四年二月）に指摘されている。



- ⑭ 注⑬の橋本氏の論では、『源氏小鏡』における浮舟の物語は、浮舟のみに焦点を当て物語の叙述を編集することで浮舟が悩み失踪するまでを一気に展開していることを指摘する。